

India

インド視察報告書

(2006年10月15日～22日)

公認会計士・元衆議院議員 若松謙維

1. インド「人口大国とIT」視察開始－35番目の訪問国

10月15日(日)、第7回目となる若松事務所企画の海外視察が、今回はインドにて行われた。BRICsと呼ばれる人口大国への関心が強まる中、我が国とインドの今後の関係がどうなるか等を推察するため、10億人以上の人口を有し、20～30年後には中国を抜き、世界一の人口大国となるインドに入国したのは、10月15日午後5時過ぎであった。

毎回参加していただく同行の顧問先の経営者3人と共に、直ちに、デリー市内にある日本大使館を訪問し、4年前、南アフリカ大使であった榎大使と再会でき、多くの貴重な情報を頂いた。

翌日の16日(月)早朝、早速、デリーから200km離れたアグラへ車で移動し、4時間強の車中からのインド視察が始まった。写真は、幹線道路で走行中の際、偶然、隣あわせしたトラクター搭乗者を取ったものである。



良いシャッターができなかったが、この道中、まさに人口大国の喧騒がいたるところで見られました。大型乗り合いバスの屋根に30人以上の乗客が乗っていたり、動物も人間と同じ宇宙・自然界の同じ生命体意識を持つヒンズー教の考え方からか、幹線道路内で歩く牛を避けながら運転する一方で、反対車線を走るべき車が、ガソリン消費を惜しみ、リスク覚悟でこちらの車線に入って、あわや衝突寸前の運転さばきに感心し、牛のほうが、人間よりマナーが良いと感心したり、新発見の連続でした。



私は、今まで、34カ国訪問し、特に、本年1月、34カ国目の訪問国となったフィリピンと比較しながら、インドの宗教、生活、経済等を見ています。現地から、できる限りの最新情報をお伝えします。今回は3つの報告です。

一つは、ヒンズー教三大祭りの一つである「デイワリ」の開催中にデリーに訪問できました。夜は、街の中心地はイルミネーションで飾られ、電力事情の向上を実感しました。この祭りは、インド2大叙事詩である「ラーマヤナ」に記述に関係し、ラーマ王子の妃シータが魔王ラーヴァナを退治し、妃を奪い返した物語に対して、インド人の8割強のヒンズー教徒が、国を挙げて喜びを分かち合うものとなっています。

なぜ、この物語に国民が祝意を示すのか？インド人の精神的・哲学的基礎からか？21世紀になってもこれほど、妃シータを奪い返した物語を我が事のように喜びあえるのか？ここから、インド人の謎に挑戦することになりました。

二つ目は、なぜ、ここ数年間で、インド最大の輸出産業がIT産業となったのか？前述の複雑な体系を持つヒンズー教を信奉するインド人の精神性、哲学性が最大の要因となっているようだが、その真実は何か？等、近年、インドブームの淵源を探る視察を開始します。

三つ目はデング病です。夜の蚊はマラリヤになりますが、今年は昼活動する蚊が伝染させる「デング病」がデリー周辺で大発生し、100人近く死亡したとのこと。クーラー内の水溜りなど、家庭内で発生しており、政府は注意を呼びかけています。ヒマラヤ山脈に近いデリーでは、夏の熱風のたまり場所となり、日中は40数度になり、体力が消耗する夏、秋口にデング病にやられるようです。しかし、昼間は、10年前によく聞かれた蚊の攻撃は現在ではほとんどなく、急速な成長国家インドの一面を見ました。

2. ヒンズー教とアグラ

(1) アグラはイスラム皇帝が建設

アグラは、人口120万人規模で、インド国内で一番人気のある町のようなようです。13世紀からイスラムによるインド支配が始まりましたが、ガイドの説明によると、1526年に成立したムガル帝国は、アフガニスタン北部の中央アジアから来た裕福な一族によって建国されました。

アグラを首都と決め、写真のアグラ城を建設しました。ムガル帝国は、ヒンズー教徒から搾取を行わず、アグラ城建設をはじめとして、インド国内に様々な公共事業をもたらし、イスラム教との融和政策を維持したため、ヒンズー教徒の大規模な抵抗はなく、世界遺産である「タージマハール」を建設した5代皇帝シャー・ジャハーン時代に最盛期を向えました。



(2) イスラム支配とイギリスの漁夫の利

しかし、7代皇帝の時代には、ヒンズー教徒の差別化を行い、イスラム教徒との対立が激しくなり、国力が弱体化してきました。

同時に、1600年に東インド会社を設立したイギリスは、ボンベイ、カルカッタなどの都市を支配し、その後、インド内のフランスなどの列強国を撃破し、さらには8代皇帝を幽閉（暗殺？）、1858年にムガル帝国は滅亡し、いとも簡単にイギリスの直接統治が開始されました。

(3) 権力好きのインド人とヒンズー教

ヒンズー教は、日本の八百万の神という言葉に似た、3億を超えるヒンズーの神々を崇拝しています。また、インド人の精神性・哲学性が育んだ宇宙の概念、輪廻とカルマ（業）思想、解脱への道を体系化したヒンズー教は、大変複雑で、インドで起こる現象全てに関係しています。

イスラムまたはイギリスなどの侵略者を、大きな抵抗もなく受け入れ、権力者には従順な姿で接することができる背景は、ヒンズー教の考え方に、厳しい現実をカルマ思想で受け入れ、それでも輪廻思想で、いずれは解脱が得られるという希望を失わない精神性・哲学性の強さから来るのではないかと理解しました。

また、ヒンズー教はブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの三神を一体的にとらえながら、これらの神が様々な姿・役割を変えてヒンズー教徒の現実の生活と一緒に暮らしており、アイドル的側面にとらえるため、インド庶民の人気者のようです。このような背景から「デイワリ」という祭りを、インド人が大いに喜び、ムンバイでは、学校が3週間近く休みになるほどです。

今回、デリーからアグラへ車移動する際、何度か、州を越えました。その時、運転手が通過する州政府へ車税を払う光景がありましたが、普通の支払手続を

行くと、役人からさまざまな理由を付けられ待ち時間が伸ばされるため、賄賂を払い、時間縮小を試みていました。賄賂は、アグラ城視察の際の入場券購入の際にも見られ、インドの生活のいたるところで行われているようです。賄賂をもらうヒンズーの神々もいるとのことで、賄賂を卑屈に考える思想は薄いと感じました。

(4) インド人とIT国家

2010年までに、インドのソフトウェア輸出は500億ドルを超える計画で、その価値は現在のインド総輸出額を上回るようです。

インドの一人当たりの国民所得は620ドル(2005年世銀資料)、識字率は現在でも42%と、一般大衆は貧しい生活を余儀なくされており、神々を慕うヒンズー教徒インド人の姿が見えてきます。一方、IT産業はうなぎのぼりに成長しています。ITとインド人の精神性・哲学性がどのような関係にあるのか、それをムンバイ、バンガロールで発見、探求してまいります。

アグラでの世界遺産は、数世紀前の建造物で、かつ、イスラム社会の過去の遺産あり、2千年以上前の欧州の建造物とは歴史的厚さが違います。インドの面白さは、これらの観光資源より、インダス文明からさかのぼり、現在のインド人の精神性・哲学性の研究ではないかと期待を膨らましています。

3. 人口大国最大都市ムンバイの洗濯所－5千人が労働

ムンバイは、イギリスが1600年に東インド会社を設立した、インド最大の商業・金融都市です。人口1600万人(人口密度36,000人/1平方キロメートル)が狭い半島に住み、ムンバイ市内、至る所人ばかりです。視察時間が1日しかとれず、病院と洗濯所を紹介します。

(1) インド最高レベルの病院視察

ムンバイ到着の翌日の10月18日、「サイフィー病院」と呼ばれるイスラム系病院を視察しました。営利を目的とするアポロ病院グループとは異なり、昨年、ボーラ共同体と呼ばれる、世界に点在する百万人の裕福なイスラム教シーア派の寄付者によって設立された財団経営を行っています。財団設立時に集まった寄付総額は40億円で、病院の建物だけでなく、病院内の設備は近代的で、豪華な病室があり、インド一の設備を有する病院と確信できました。

ベッド数は196しかありませんが、デラックス・ファースト・エコノミー等、

入院費の値段により病室が分けられています。宗教に関係なくだれでもこの病院を利用でき、しかも、入院費無料の一般病棟（44 ベッド）は、貧困層のだけれども入れるシステムとなっていました。これは、イスラム教の相互扶助思想から来ているようですが、外来診察時間が 1 日 2 時間と、入口制限をして、外来・入院・治療にあたっています。

日本の病院制度は、限られた財源の中、国民皆保険制度を維持するため、低コスト重視、大量診療・治療を前提としている結果、総合病院を中心に慢性的な医師・看護師不足に悩まされています。しかし、この病院は、裕福な寄付により運営資金が提供され、また、治療費も、患者の所得に応じて柔軟に決められており、医師が臨む治療を行える環境が整っていました。

医師陣は 239 人もおり、コスト経営を気にしなくてもよいせいか、全ての専門科医を有しながらも、わずかの診療人員が割りふられているため、一人当たりの診療コストはかなり高額になると推察しました。更には、MRI 等、どの設備も最先端のものを保有していました。写真は、アジアに 1 台しかないという、筋力回復測定装置（1 千万円）であり、たとえば、有名選手が筋力治療・回復を行うため、全世界から治療に来るそうです。



（2） 世界最大の洗濯所

ムンバイ市中央からやや北の競馬場の近くにある、世界最大の洗濯所を視察しました。5,000 人が写真の洗濯所で洗濯を行っていました。ボンベイは、恒常的な水不足と、各家庭及び企業に洗濯機がないため、1 グループ 10 人前後のチームを組み、営業配達、水洗い、乾燥、アイロンを全て手作業で行い、1 枚 25 円のクリーニング代を得る仕事が 5 千人によって行われていました。



1,600 万人の洗濯を担う人口大国の一面を見ようと、わずか 5 分間の駐車時間に警察官から文句を言われ、約 4 百円の賄賂を払い、その場から離れることができました。

4. 世界最大のIT拠点ーバンガロールと日本経済

日本の夏以上に蒸し暑いムンバイから、インドで一番気候が温暖で過ごしやすいバンガロールに移動したのは、10月19日（木）でした。

(1) セント・ジャーミッシュ学校

バンガロール到着後最初の視察は、バンガロールのIT視察を案内してくれた、JINインフォメーションセンターのアレックス・ヴィルキー社長の出身校である、クリスチャン系のセント・ジャーミッシュ学校でした。

小学校6年（義務教育）、ミドルクラス2年、ハイクラス2年、専門課程2年の12年生課程となっています。生徒1,650人および教師58人がおり、1月の授業料が約1万5千円の中クラスの私立学校とのことです。

休み時間になると、小学生は元気に狭い校庭を走り回り、好奇心旺盛のためか、私が校舎の2階から手をふると、大勢の生徒が手を振ってくれました。



授業は、小学校5年生の算数と、4年生の理科の授業参観をさせていただきました。一クラス50人強が4人掛け机の狭い教室で、教師とゲームで遊んでいるような感覚で、熱心に勉強していました。



授業は全て英語で行われ、インド人の英語力のすごさを見せ付けられました。インドでは、国民統一の言語はなく、上級階級では英語、下級階級ではヒンズー語、さらには州ごとに異なる言語が使われているため、憲法では17の公用語を認めています。前述のヴィルキー社長に聞くと、現地のカルナータカ州の言葉はほとんど使わないため忘れたと言ってお

り、英語が主要語になっているとのこと。この学校のほとんどの生徒が英語中心の生活になっているようで、上級階級では、インドに根づくカースト制度の階層差別より、英語力の差別が実質的に、就職、生活に大きな影響力をもっているようです。

(2) カルナータカ州政府企業誘致局

人口 5.6 百万人のバンガロールを有するカルナータカ州の人口は 55 百万人おり、農業中心の生産性が低い州でした。しかし、科学技術としては、1909 年設立のインド科学大学院大学があり、1991 年の経済開放政策以降、バンガロールが頭出して IT を中心に成長しました。

当日対応してくれた局長から、州政府がバランスの良い産業育成を目指し、現在では、毎月、100 社前後の企業がカルナータカ州に進出し、その 7~8 割がインド企業、その他が外資企業、日本企業は 2 社程度との説明がありました。

トヨタが 2000 年からこの州で生産を開始し、現在、支店 (13)、駐在員事務所 (10) を除くと、現地法人化した日本企業 (52) 内、車 (11)、IT (13) が主要な進出企業となっています。ここでも、企業進出の許認可権を速く得るには、局長などへの賄賂が必要のようです。

IT 拠点らしく、局長から頂いた企業誘致資料は、CD または MD などのコンパクトなプレゼンテーションとなっていました。

(3) (株) ナビス日本語トレーニングセンター

ジャスダックに上場しているクエストの孫会社として、バンガロールに、オプティス・インド (60 人のソフト開発会社) およびナビス日本語トレーニングセンター (社員 13 人のうち、日本人教師 6 人) を設立しています。私達は、2005 年 6 月設立された日本語トレーニングセンターを訪ね、午後 7 時から始まる実際の授業を参観しました。

前述したように、インド人の言語への対応は、日本語のような固定的観念がないためか、必要とする言語に対しての吸収能力はきわめて高く、当日の受講者も、IT 企業、大学教授等の社会人であり、3 ヶ月も習えば、日常会話は普通に話し、半年間で中 3 レベル、英検に相当する 1 級希望者も現れているようです。



日本語ができる IT エンジニアリングは、バンガロールでは数千人規模にしようとしています。政府助成金なしに行われているため、現在では 200 人前

後と推測され、インド人IT技術者がわざわざ日本語を習うより、英語圏での就職を優先しているようです。

バンガロール内で日本企業向けのソフト開発を行う日系企業は、当社、日印、フジ、そしてバンガロールを案内してくれたJINの4社のみです。

中国・大連は、日本語人材5万人計画を政府主導で進めており、今後、バンガロールと大連のIT合戦が激しくなりそうです。

(4) (株) JINインフォメーションシステム

バンガロール視察2日目の20日(金)は、前述の「デイワリ」祭りによる休日でした。しかし、JIN社内には、インド人社員30人の1/3が出社しており、日本企業から受注したソフト開発を行っていました。アプリケーションソフト開発がメインであり、日本国内の平均受注金額の3~5割の値段で提供しているとのことでした。

大連などの中国IT会社は、日本語漢字が理解できるハンディがあるが、ソフト開発能力は、インド人が上回っているようです。



(5) ITPL

1994年、シンガポール政府系企業、カルナータカ州政府、TATAの3社合併により、バンガロール市中心部から東へ15km離れた土地を取得して開発した、ITパークを視察しました。



この敷地内は、現在、最後の建物となる6棟目を建設中であり、全ての企業のソフト開発は輸出向けであるため、10年間の無税優遇措置を受けられるとのこと。当パークの近隣にも、近代的なIT企業のビルが建設され、または建設中であり、数年後の様変わりの姿が予想できました。

カルナータカ州内には、「Electoric City」および「STPI」と呼ばれるITパークがあり、これらの地域に1700社のIT企業が存在し、そのうち500社が外資企業となっています。

(6) JETRO (日本貿易振興機構)

インド訪問最後の視察として、在インド日本大使館の榎大使から紹介を受け、インド在住10年以上の久保木氏(バンガロール事務所所長)に面談し、同氏からバンガロールを中心としたさまざまな情報を入手できました。

バンガロールの平均所得は、デリー、ムンバイに次いで、インド国内では3位となっています。久保木氏との意見交換から、今後、バンガロールが世界のIT拠点となるのは間違いなく、日本経済との関係性を強化する必要性を実感しました。

また、今回のインド視察を通じて得た私の感想は、『インド人は先天的に自分の身近にあるデータベースを区分する傾向を生み出しているのは、インドの無数の神々と多様性を受け入れるヒンズーの精神性・哲学性にあり、これがITのデジタルによる情報整理伝達技術をインド人が得意としている背景である』との考えを久保木氏に問い、インド滞在に疑問に思ったことの意見交換を行うことができました。

以上で、「インドの人口大国とIT視察報告」を終了します。今回の視察は、21世紀という情報・IT時代の世界の今後の姿を予想させる大きな潮流を、このインドで見ることができました。これからも、「世界で鍛えた行動力」で、地球規模で活動してまいります。

以上